

医療宣教師“John C. Berry”がめざした 医学校設立運動について

布施田哲也

公立丹南病院

John Cutting Berry (1847-1936) (以下ベリー) はアメリカンボードより派遣されたジェファーソン医科大学卒の医師の資格を持つ宣教師で1872年に来日している。1893年の離日まで神戸・岡山・京都でキリスト教の布教また西洋医学の教授と医療活動に多大な貢献をしてきた。日本では開国以後、医学は中医学ではなくて西洋近代医学を主とすること、また1869年には西洋近代医学の見本をドイツ医学に求めることが決定された。これ以降ドイツ人医学者が多数御雇い外国人として来日し、ドイツ語による医学教育が東京大学医学部を頂点とする官立大学でおこなわれていった。

医療宣教師ベリーの功績としては、日本の監獄改良、県立病院の運営、同志社病院・看病婦学校の設立、濃尾地震の際の災害緊急医療の実践等があげられる。新島襄や同志社関係者は、日本の大抵の医師が悲しいほどに腐敗していること、無神論や懐疑主義にかたよったドイツ医学が官立大学を中心に浸透してきていること、医学校設立の理由が純粋に学問的・専門的であって宗教や道徳という面には全く配慮されていないことを危惧していた。

1883年5月 新島襄は関連14教会の牧師との連名でキリスト教主義に基づく医学校設立運動をベリーに取り組んでほしいとの請願起案文を送った。ベリーも来日以降、“キリスト教の良い影響下でのキリスト教的視点に立った医学教育”を提供したいと考えていた。医学校設立に必要な教授陣の派遣や医療機器の購入費用を外国の有志の基金でまかなうことができれば、起案者(同志社)は、その事業で必要とされる寄宿寮や講義室、病院等の建物や土地を確保することを保障するといった内容であった。ベリーは設立運動に参加するにあたり、日本のプロテスタント各派から趣旨に賛同する旨の意見表明を得た。キリスト教主義に基づく医学教育並びに医師養成が、伝道をより広めるうえでも当時の日本にとっても有用であるという共通認識があった。これを受けベリーは、東京大学と同等もしくはそれ以上の国際的な実力を持つ医学校にすべく、少なくとも4名の外国人教師と3名の日本人教師が必要と考えた。

1884年から1885年にかけてベリーが米国内でおこなった運動の起案書でもある“日本におけるキリスト教主義に基づく医学校・病院・看護師養成学校の可及的速やかな設立を求める声明および日宣教師等による推薦文”(Statement showing the urgent necessity of establishing a Christian Medical School, Hospital, and Training School for Nurses in Japan. Philadelphia, May 19th, 1884)で今までの経緯、医学校が必要な理由また多くの賛同の意見が寄せられていることがわかる。この声明の中でベリーは以下のようにのべている。

“ドイツの影響が日本の医学教育に浸透しており、現在ドイツ流の教育を受けた日本人医師が続いている。ドイツ人による教授の独占的な立場は日本人学生に強烈な印象を与えており、若い人々は西洋医学の領域をあたかも一種のドイツ医学文学(日本において医学表現の最も信頼のおける方法はドイツ語であるという思い込み)と考えている節がある。イギリスやアメリカの先進医学を見せることや生徒達に真の科学というものは、極端な一国に偏ったり特定の民族に属するものではなく、世界中のすべてのものであるということを印象づける学校になれば、日本の医学の真の発展や開放に有効であることが示せるであろう。”

ベリーのアメリカでの基金集めは、アメリカンボード本部の躊躇と長老派教会などからの好意的な反応によって各派連合体による医学校を設立する案に変更となった。その後基金集めの不調と連合案に対する日本ミッションからの反対により医学校計画は断念することになった。結局アメリカンボードの単独事業として同志社病院・京都看病婦学校のみが実現することになる。この一連の動きは日本医学教育史から注目されることは少ないが、実現していれば大きく歴史がかわっていたと思われる、ベリーがめざした医学校設立への概略を紹介する。